

## ERNEST GRISET の絵本におけるグロテスク

梅花女子大学大学院

三宅興子

1. はじめに・・・こどもの絵本の歴史を見ていくと教育・訓育を目的としたものと明らかに違う別の系譜のあることに気が付く。親・教師の与えたいものと、子ども読者の好みには、ずれがある。エルネスト・グリゼ(1844-1907)は、19世紀後半のイギリスで、人気のあった絵本画家であったが、現在では、「忘れられた」画家といつてもよいだろう。もし、子どもに支持された絵本の歴史が書かれたら取り上げられるものと思われる。グリゼは、フランス生まれで、ロンドンで書店を経営していたおり、そこに展示していた作品が認められ、1865年、風刺雑誌「パンチ」に登用されるが、編集長の好みとあわず、5年ほどでやめ、以後、当時流行していた「グロテスク」な味つけをした動物画で人気をえていった。ちょうど、手彩色からカラー印刷へ変わってきており、絵本も多数出版されるようになってくる時代であった。

2. グロテスクとは・・・グリゼが得意とした画風の「グロテスク」というのは、美術用語で「唐草模様の中に人間・動物・果実・草花・武器などをあしらった古代ローマの装飾模様」(『新英和大辞典』)をいい、その模様が地下の墓窟grottoに多く見られたのを語源としている。ヴィクトリア朝の繁栄のなかで、ひとびとの好むところとなり、怪奇的で異様、不気味なものを感じるようになっていく。グリゼの絵本には、グロテスから“quaint”へ、そして“funny”と対象が子どもになるにつれ変化していくが、子ども読者に支持されたのは、そのグロテスクの要素ではなかったか、と仮定して、グリゼの絵本を分析してみたい。

3. 代表作 *Griiset's Grotesques: or, Jokes Drawn on Wood*(1867)・・・トム・フッドの88篇の社会風刺詩に、グリゼのさし絵100葉が入っている詩集(手彩色)であるが、タイトルに画家名がついているように、グリゼのグロテスクな絵で見せる絵本である。例えば、“Dreadful Undertaking”をよむと、犬の母親が亡くなり、子犬が泣いているところにカラスの葬儀屋がきて、埋葬してあげるという。

Where she's buried no one known—

You can't learn it of the crows:

どうも埋葬時にカラスも病気にかかって死んだようだ、というのが結末がついている。悲惨な内容にもかかわ

らず、ことばでカラスの死がこつけいに表現されているため、おかしみを含むことになった。グリゼのさし絵は、子犬の悲惨な状況を描き、カラスの不気味さを表している。“Three Jolly Beggars”でも、不幸な目にあって乞食となった三人を「ゆかいな」といい、結末に“If children won't do what they're bid, they'll have to do what's worse—”にはじまる MORAL をついている。不幸を逆手にとって、絵に三人組の様子を面白おかしく描くことで、効果をあげている。また、“Education Thrown Away”でも、学校にいっている magpie の意味のなさを浮かび上がらせている。ここで、「グロテスク」は、文と絵によって社会や制度の不条理を炙り出す仕掛けとして働いている。(図1)

4. 動物画を楽しむ *Aesop's Fables* (1869)・・・ラ・フォンテーヌの寓話を読みやすい散文にし、グリゼの動物の表現を楽しめる244ページもの大部な画集になっている。1ページ大の迫力ある絵が7ページ毎にはいっており、黒々とした大きい画面が寓話のもつ闇の部分をつきつける。

5. シリーズ：“Ernest Griset's Funny Picture Books”について・・・1870年代から80年代にかけて、いわゆる上品で美しい絵本が輩出したなかで、グロテスクでおもしろいグリゼの絵本は、大人側から評価されることがなかったのか、全く論議の対象とされることなく今日に至っている。そのため全容の解明は、困難であるが、4冊を合本した(内1冊は単行本としても確認している)画家名を冠した「おかしい絵本」集を取り上げてみる。タイトルは次の通りである。

I. A Funny Book about the Ashantees.

II. The Brothers Bold: Their Marvellous Adventures in Central Africa.

III. The Three Youthful Mariners.

IV. A Book of Funny Beasts.

いずれも片面彩色印刷で、12葉あり、画面の下に、2か4か6行の、2か4連の詩が入っている。I.は、アフリカの架空の種族を「コミカル」に描いている。II. JimとJohnという兄弟がアフリカで次々と動物と遭遇するさまを描き、最後にワニに乗って帰還する。

“Remember that it must be true,/ Because it's in a book と終わる。III.は、難破したにもかかわらず、

助かった三人組の水夫の危険からの逃亡の物語で、やはり、アフリカの動物、黒人を「おもしろおかしく」取り上げている。IVは、ナーサリー・ライムのパロディーである。アフリカの黒人や動物で笑いをとる場面が半数を占めている。黒人がワニに追いかかれている組み合わせは、グリゼが笑いをとる常套手段であり、『ちびくろサンボ』(1899)の系譜へつながっていく。この絵本では、食べる・食べられるというサバイバルテーマが描かれている。第4場面では、水辺の美しい風景のもと、魚とハエが対話している。“Who Killed Cock Robin のパロディーで、ハエは釣り糸につながれ画面では姿のみえない少年が釣りをしている。第7場面では、“Black Baby Bunting”で、“Bye Baby Bunting”のもじりとして、ウサギ狩をダチョウ狩に変え、そのイメージの落差からくるおかしさを表現している。4冊のなかには、「狩り」が数多く描かれその危ういシーン（もう少しでたべられそうになって必死で木に登っているとか、大急ぎで走って逃げているなど）を多用しており、怖くておもしろい絵本を求める子ども読者を想定していることがわかる。その関係を特徴的な1ページを見てみる。文は4行2連である。

See-saw, shut your jaw;

Would you like to swing any faster?

You don't get me in your greedy maw;

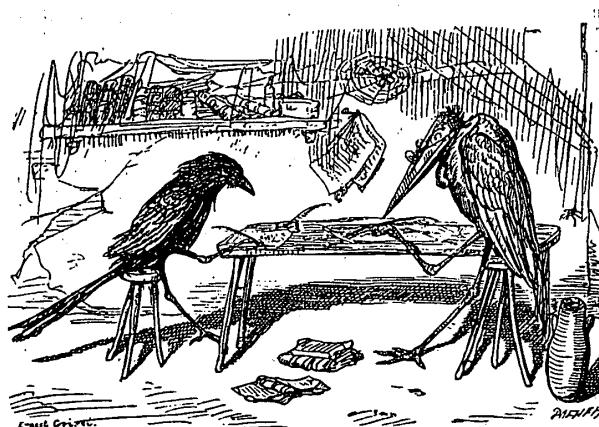
For once I am your master.

Wait awhile, Crocodile!

Don't get your self in a flurry.

Wouldn't you like to get back to the Nile?

But you mustn't be in a hurry.



(図1)

口から火をふいて迫るワニと「待って！」ともう先にいけないギリギリで木の枝にぶらさがっている人物との関係をぞくっとしながら楽しむのである。(図2)

6. キャラクターとしてのキツネ・・・絵本の出版がすすみ、動物のなかでもよくとりあげられるものとそうでないものが分かれてくるとき、キツネを主人公とした絵本が続々と出版されている。身近にいて農場の鶏をさらったり、イソップなどで「悪役」として描かれ、イメージが出来上がっているのであるが、その「悪役」ぶりがおもしろく受容さあれたものと考えられる。グリゼも好んで描いているが、キツネをステレオタイプな役割でなく使った傑作を残している。The Funny Fox and Their Feats at the Fair(1887)である。芸人一家のキツネの家族が朝起きて縁日で芸をして、夜家に帰ってくるまでの物語である。父母と5ひきの兄妹を描き分け、画面のなかで確認するおもしろさもあり、ページをめくる効果も計算されている。

7. グリゼの絵の魅力・・・グリゼの絵には、動きがあり、戯画化して、もとの動物や人物の特長を引き立てるおもしろさがある。グリゼは、James Greenwoodとのコンビのさし絵や、William Manning: A Child's Dream of the Zoo(1889)の夜の動物園の幻想的な絵、また、盛んだった雑誌の仕事、特に、Little Folksでの活躍など評価できるものが多い。しかし、絵本のなかで野生をどう考えるかのテーマも含んでいるもの “Earnest Griset's Funny Picture Books”でみてきたように、黒人を“funny”を描く材料としていることは、今日には通用しない内容であるので、時代の制約を抜きにして論じることがむずかしく、「子どもの喜ぶ絵本」という課題の困難さを再確認することとなった。

(図2)

